

陰謀進

週刊

2024年
7月 第5週

発行元
最前線
anarcho.clitorist@gmail.com
担当・記事 仁科 夏瑚
記事 津島 龍三

保存用 紙版
1ヶ月 500円

月毎に郵送いたします。
詳細は上記連絡先まで

「自立」と「協力」のもとに集え

クリトリスはアナキストである！

カトリヌ・マラーブー
『抹消された快楽 クリトリスと思考』より

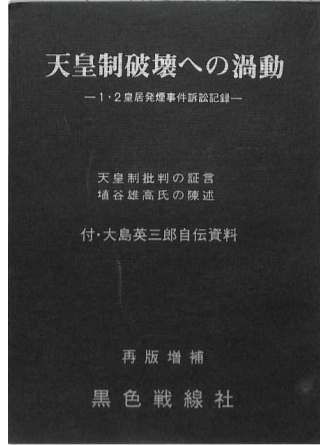


徒党
陰謀派

反天皇制を問う 烏合社学習会から

七月二日に烏合社主催の反天学習会に参加した。課題図書は『天皇制破壊への渦動―1・2皇居発煙事訴訟記録―』（ギロチン社・ネビース社・黒色戦線社一九七一年）で、一九六九年一月二日に皇居前で行われた一般参賀に際し大島英一郎とK（仮称）が発煙筒を投げ、反天皇制をアジったビラを撒いた事件の裁判記録である。

▼69年皇居発煙事件の記録



版の冊子の末尾には、当日撒かれたビラの内容と思われる「大衆に訴う」と題した文章があり、そこでの「天皇制は悪だ」という主張は個体的論である。つまり天皇制それ自体が悪い、だから廃絶せねばならないというわけだ。

また課題図書に収録されている植谷雄高の証言記録にも「天皇制、というものは、現代の資本主義制度のための一つの枠の一端であって、天皇制だけを取り出して非難しても天皇制が変化することは無いと思えます（九頁）」とある。大島らの主張はどこか根本でズレていると感じざるを得ない。

彼らの主張は反天皇制であり、天皇制を直接行動で廃絶することが彼らの目的である。学習会ではそれを報じた当時の新聞記事も交え、直接行動としての性格が議論になった。当時の社会運動の文脈において反天皇制を掲げる運動は極めてまれだったことから、反天皇制を謳う活動自体が突出したものとして注目されたこと、直接行動としては学生からの反応が冷たく、後続の反天皇制運動への接性が希薄だったこと等が指摘された。総じてこの事件は単発的な性格が強く、直接行動としての意義は薄いと私は思う。

しかし私はこの主張に違和感を覚える。というのも天皇制の歴史においては、天皇制はあくまで時の権力を基礎づける権威として機能していた時代がかなり長く、天皇制それ自体が悪だ、と言える時代はそう多くないからだ（平安時代の藤原氏による貴族政治や室町時代の足利氏、江戸時代の徳川氏による武家政治を思い起こすとよい）。そう考えると反天皇制を訴えるなら、その権威におもねる政治家・官僚が政治の実権を担っており、悪だと言うべきではなからうか。二・二六事件で決起した青年将校のような主張になってしまい、アナキストと

本学習会では天皇制の問題点について私が問うと、その存在そのものが基本的な人権や法の下の平等といった憲法上の擬制との矛盾を生んでいることが指摘された。しかしそのような擬制の効果が我々の生活圏に危機的に波及しない限り、やはり反天皇制と言っても支持を得るのは難しい。昭和初期に日本（大日本帝国）を破壊に導いた張本人として昭和天皇を、ひいては天皇制を弾劾し、それを直接行動あるいは運動として問題にできるのは、当時の戦況・統後

の生活を経験している高齢者くらいだろう。今回の学習会を通じて私は天皇制の問題化、というよりもその思想的継承の難しさを感じた。このまま反天皇制言説は先細り、やがて消滅するのか、それとも細々と思想的系譜は継承されていくのか、数年後に何らかの思想的ブームとなって復活するのか。反天皇制の行く末は私にとって未知数である。（文・津島龍三）

七月二六日夜（日本時間二七日未明）、パリ中心部のセーヌ川を舞台に、パリオリンピックの開会式が行われた。このパフォーマンスを巡って、主に二つの演出が物議を醸している。マリー・アントワネットのギロチン処刑の演出と、ドラッグ・クインによる「最後の晩餐」に扮した演出である。「フランス革命は野蛮な黒歴史だった」、「下品な女装によるキリスト教の侮辱」。こうした声が、主にSNS上で保守派から上がっている。果たしてこれらの演出は「やりすぎ」だったのか？



パリ五輪開会式に寄せて

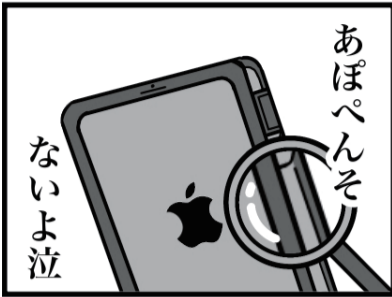


「グロイ」と物議を醸した処刑のパフォーマンス▼
出ではなく、多数派や体制におもねった無難な演出と見るべきなのだ。今日の政治的な問題意識は、およそすべてがフランス革命で生じた、フランス・イデオロギーに牛耳られている。「右翼・左翼」、「三権分立」、「国民国家」等々。フランス革命はまさに「近代」の生成経緯そのものであり、それを論評することにはあまり意味がないだろう。（文・仁科夏瑚）



ADHD差別企業

漫画：仁科夏瑚



フランス革命は「黒歴史」なのか？

「右翼・左翼」、「三権分立」、「国民国家」等々。フランス革命はまさに「近代」の生成経緯そのものであり、それを論評することにはあまり意味がないだろう。（文・仁科夏瑚）

